

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320003

研究課題名(和文)物質・生命・人格をめぐる哲学と自然科学の交差に関する理論的および実践的研究

研究課題名(英文)Theoretical and Practical Studies on the Crossing between Philosophy and Natural Science concerning Matter, Life, and Person

研究代表者

一ノ瀬 正樹 (Ichinose, Masaki)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：20232407

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,100,000円、(間接経費) 3,330,000円

研究成果の概要(和文)：「物質」、「生命」、「人格」という三つのキーワードを軸にして、自然科学と哲学が交差敷く行くありさまを描き出し、それによって、哲学研究を社会に発信・還元していくという当初の目的に対して、因果論、心の哲学、言語哲学、ケアの現象学、古代ギリシア自然哲学といった多様な観点から論文や口頭発表を行い、大いにその狙いを果たした。とりわけ、研究期間中に発生した東日本大震災と福島原発事故に対して、多くの研究者が批判を恐れ発言を控える中、特に研究代表者が、哲学サイドから緊急的な提言・発信をあえて果たし、被災地の復興という至上命題に関して一定の寄与をなした。科研費の公的性質に照らして、好ましい成果だったと思う。

研究成果の概要(英文)：Our project is concerned with a question on how philosophy should interchange academic ideas with natural science. In order to carry out the project, we highlight three keywords, namely, "matter", "life", "person", which correspond to John Locke's historically famous distinction of the three notions of identity. As to matter, we mainly studied the relation between physiological phenomena of brain and human mind. As to life, we conducted research from an applied ethics point of view. For instance, Ichinose published a paper on the death penalty in the light of free will debate. As to person, for example, we investigated Hume's concept of personal identity, or examined the notion of "care" from Phenomenology's viewpoint. Additionally, we reacted to the big earthquake and tsunami that attacked the East part of Japan on 11 March 2011 followed by the Fukushima nuclear power plant's accident that emitted radioactive matters. We published papers, considering physics and medicine.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：哲学 人格 自然災害 物質 生命

1. 研究開始当初の背景

21世紀の今日、哲学の研究を自然科学への眼差し抜きに遂行するのは著しく困難であるといわなければならない。このことはなにも現代哲学の先端的な主題に対してのみならず、伝統的な哲学の課題にも妥当する。一例を挙げるならば、伝統的な形而上学の問題である自由意志というトピックを論じるに当たって、今日、脳神経科学の知見をまったく無視して論じることは説得力を持ちえなくなっている。生理学者のベンジャミン・リベットが、脳科学的な実験によって、人間がある行為を意志的に行おうとするとき、当該行為に対応する「準備電位」と呼ばれる変化がまず脳内に生じ、その後、意識に対する「意識」が生じ、そして行為が発生する、という順に現象が生じることを確認し、それが自由意志の存在に対して一つの疑問を投げかけることになった。つまり、意識的な意志に先立って、脳内の生理的な変化がまず生じることで、人間の行為は生起するに至っているように思われ、だとするならば、古典的な意味での、行為の起点としての自由意志なるものの存立は疑わしいのではないか、という立論の可能性が生理学者によって提起された。こうした論点に対して、では伝統的な自由意志論はどのような応答ができるのか。ここには哲学と自然科学の交差した、典型的な問題様相が現れている。本研究は、こうした二つの分野の交差の諸様相へと理論的および実践的な視点を混ぜ合わせながら接近し、哲学と自然科学の現代的な交わりから発生してくる根源的な問いを主題化し、そしてそれを伝統的な問題設定へとフィードバックさせることで、将来のあるべき哲学研究の一つのスタイルを描き出すことを目指している。それは、その学際的な試みの態勢を介して、哲学研究の現場からの一般への発信へと必ずや結びついていくだろう。

2. 研究の目的

「物質」、「生命」、「人格」という、ジョン・ロック以来の古典的な三分区に即しながら、現代の文脈において、哲学の研究と自然科学の活動とが交差・交錯してゆく場面を主題化して、まずは哲学の視点から、そこに生じる諸問題の理論的解明を目指し、同時にそうした場面のもとで発生してくる実践的かつ倫理的な課題の検討をすることを研究目的とする。それは、単なる科学哲学の研究というのではなく、自然科学の提示する論点の中に哲学の基本問題への提言を読み取っていく試みである。ここでいう「自然科学」とは、おもに物理学、生命科学、脳神経科学などのことだが、自然科学のツールとしての統計学も射程に入れてゆく。

3. 研究の方法

本研究はまず「物質」あるいは「実体」の概念に第一の焦点を当てる。物質あるいは実体

とは、哲学の古くからの問題系を形作る存在論的な概念であるが、もちろんそれは同時に自然科学的探究の基盤でもある。この物質・実体概念を、哲学と自然科学、とりわけ物理学との連関の位相において論じるには、まずもって、量子論的な現象に注目しなければならない。すなわち、いわゆる観察問題や不確定性関係に現れている、物質と観察との依存関係、そして反粒子やタキオンなどに即して現出する、物質と時間性との関わり、こうした問題を主題化しなければならない。これらの主題を哲学的に論じるときには、どうしても存在論・オントロジーや時間論や因果論といった形而上学の問いに対峙する必要がある。21世紀になって、世界的に形而上学の研究が興隆し、いまや形而上学ルネサンスの様相を呈している。本研究では、こうした現代形而上学の動向に注意深く目を配りつつ、とくに、本研究の背景となるところの先行的な科学研究費補助金による研究、「知識・行為・制度をめぐる「因果性」と「志向性」の哲学的解明」での成果を踏まえる形で、因果論を核とする視点から物質・実体概念の再検討を遂行していきたい。すなわち、たとえば、原因と結果の時間的向きについての検討を、反粒子概念などに適用していくということである。このような、形而上学的な視点からの物質・実体概念の再検討は、哲学的な考察も当然要求する。それを行うため、アリストテレス形而上学を現代科学の枠に沿って検討したり、ドイツ観念論での自然哲学の構想を現代の文脈で読み返したり、といった作業が必要とされるであろう。さらに、こうした形而上学的考察は、死者や死体という形での物体はどういう身分を持つ存在なのか、ということ論じる「死者の形而上学」という、現代のホットな道徳哲学上の問題への道標ともなる。ここでの死者の問題が、次の第二の視点へとつながる。

すなわち第二に、「生命」の概念に沿って、哲学と自然科学の交差の様相を検討したい。これは、いま触れた「死者」の問題の裏返しである。この場面では、生命科学がもたらす哲学的問題提起に焦点を当てる。一つは、進化理論が提示する「自然選択」と「遺伝的浮動」という二つの進化原理の相関が検討課題となる。検討すべきは、この二原理を分けるときに浮上する「確率」や「偶然性」という哲学の基本概念をどのように理解してゆくべきなのか、という問いである。また、生物がときどき発現する「利他的行動」の意義を問うことも、倫理的な問題と絡めて、本研究の核となる課題である。さらに、「自然化された認識論」という、認識現象を自然科学的に捉えるという哲学的立場の検討もこの場面で遂行したい。というのも、認識は、生物としての人間が行う生命的活動であると考えられるからである。加えて、医学・医療的な人間観にも目配りをするため、近世以来のフランス生命哲学や、現象学的なケアの理論の観

点から、哲学と医学との交差を探っていく。

第三に、「人格」という様相から、哲学と自然科学の交差のありさまを追求してゆく。この場面で問題になるのは、人格概念に伝統的に帰属されてきた自由や責任の概念を、自然科学的知見のもとでどのように捉え直すべきなのか、という課題である。その一つの現れが、先にリベットの名とともに触れた、脳神経科学的な知見と自由意志論との関わりであり、これは本研究においてぜひとも追求していきたい。その延長線上で、いわゆる「脳神経倫理」とか「道徳心理学」と呼ばれる、脳科学や心理学の知見に沿って倫理や道徳の問題を論じる領域一般に対するコミットメントを大々的に行っていく。同時に、21世紀になって興隆してきた、統計的手法を使って自由や責任の問題などを論じる「実験哲学」にも目配りをしていきたい。また、人格概念と、人間以外の動物との関わりについても、動物行動学や動物権利論を射程に入れながら、主題化していく。そして最後に、法科学的な観点に即しながら、犯罪捜査や刑事責任の問題を科学的に処理してゆくという道筋を追いかけたい。ここには、統計学的手法を用いるプロファイリングや、やはり統計的処理を利用した「量刑の科学」といったトピックが深く関わってくる。

4. 研究成果

一ノ瀬は引き続き福島原発事故に起因する放射能問題について発信を続けた。福島高校で講演し、「情報とリスク」と題した『哲学雑誌』に被害やリスクの概念をめぐる論考を寄稿した。また、8月には実際に福島第一原発の視察に赴いた。放射能問題は自然科学的知見と哲学的思考が交差すべき典型的な事例であるからである。また、因果性の問題、死刑論、動物倫理など、従来の研究関心をも展開した。とりわけ、因果性に関して、オックスフォード大学刊行のProceedingsに論文を掲載できたことは成果であった。松永は、人間における意識の発生を、人間では、動物における「刺激・反応」の対に代わって「知覚・行動」の対が現われたことのうちに探った。また、いわゆる精神の領域を、意味次元に関わって生きてゆく人の有り方に求めるという考えを展開した。信原は他者の心を理解するとはどのようなことか、またどのようにして他者の心は理解されるかについて考察し、ミラーニューロンの働きによるシミュレーション的理解が他者理解の基本であることを明らかにした。

榊原は「物質・生命・人格をめぐる哲学と自然科学の交差」に現象学の視点から取り組み、ケアという事象における身体への医学的態度と人格への自然的態度との相違を解明した。

鈴木はフランス哲学史的観点から哲学と自然科学の交差を考察した。

ディーツは曖昧性の言語哲学的分析を続

け、曖昧性の概念はある程度制限されるべきこと、曖昧性に階層性を導入する必要はないことを示した。

朝倉は西洋近代哲学と東アジア近代哲学における自然哲学の研究を進め、原子論から差異論へと至る西洋近代の自然哲学の変遷と、東アジア哲学における形而上学的考察、とりわけ人格性をめぐる議論との連続性を明らかにした。

松浦はアリストテレスとソクラテス以前の自然哲学の思想的接点として空間の存在を前提としない運動モデルと物体の分割性が挙げられることを示した。

全体として、本研究は、「物質」、「生命」、「人格」という三つのキーワードを、自然科学的見地に照らし合わせながら、哲学的に検討を進める、という当初の目的に十二分に見合った成果を挙げることができたと客観的に言えると思う。研究期間中に東日本大震災と福島原発事故が発生し、それに対する哲学サイドからの発信が求められる、という思わぬ事態ともなったが、それに対しても、かえってそれを研究の主題として見据え返すことによって、積極的かつ意図的な成果と発信をえたと自負している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計23件)

1) ICHINOSE Masaki, Strawson on Locke's Theory of Personal Identity, 査読無, 東京大学人文社会系研究科『論集』32, pp. 1-9, 2014.

2) ICHINOSE Masaki, Beebe on Hume's inductive skepticism, *Journal of International Philosophy* 3, pp.222-223, 2014.

3) 朝倉友海, 渦巻きと折り開き: 自然哲学の可能性について, 査読有, 『流砂』7, pp. 191-205, 2014

4) ASAKURA Tomomi, Converging East Asian Philosophie, *New Confucianism and the Kyoto School Contemporary Philosophy in the Age of Globalization* 4, 査読無, pp. 111-132, 2014.

5) 松浦和也, ベルクソンとアリストテレスの間隙 *Quid Aristoteles De Loco Senserit* をめぐって, 東京大学人文社会系研究科『論集』32, 査読無, pp. 19-23, 2014.

6) 一ノ瀬正樹, 死刑論再考 - 自由・責任・不確実性 -, 『哲学研究論集』7, 査読無, pp. 1-17, 2013.

7) 一ノ瀬正樹, 「ない」ことの因果, 『思想』1073, 査読無, pp.2-6, 2013.

8) SAKAKIBARA Tetsuya, Ich und Du bei Nishida und Heidegger, *Berliner Schelling Studien* 11, 査読無, pp. 119-140, 2013.

- 9) Richard Dietz, Comparative concepts, *Synthese* 190, 査読有, pp. 139-170, 2013.
- 10) 一ノ瀬正樹, 日本における低線量被曝論争の構図, 『東アジアの死生学 IV』, 査読無, pp.38-58, 2012.
- 11) 一ノ瀬正樹, 「期待効用の概念をめぐる覚え書き - 原発事故と低線量被曝問題に寄せて」, 『論集』30号, pp.1-33, 査読無, 2012.
- 12) Tetsuya Sakakibara, The Intentionality of Caring, in Alessandro Salice (ed.), *Intentionality. Historical and Systematic Perspectives*, 査読無, pp. 369-394. 2012.
- 13) Tetsuya Sakakibara, Phenomenological Research of Nursing and Its Method, *Schutzian Research* 4, 査読無, pp. 133-150, 2012.
- 14) 榎原哲也, 「生きる意味」を支えるもの「自殺に傾く人」へのケアについての現象学的考察, 『論集』第30号, 査読無, pp.34-47, 2012.
- 15) 高山守, 「絶対的自由」をめぐる, 『ヘーゲル哲学研究』17, 査読無, pp. 1-5, 2011.
- 16) Tomomi Asakura, On Buddhistic Ontology: A Comparative Study of Mou Zongsan and Kyoto School Philosophy, *Philosophy East and West* 61, 査読有, pp. 647-678, 2011.
- 17) 朝倉友海, ドゥルーズと「人間の死」, 『流砂』4, 査読有, pp.154-172, 2011.
- 18) 高山守, 「家族」の新たな基礎づけ 哲学的自由論のもとで, 『論集』29, 査読無, pp. 1-21, 2011.
- 19) 一ノ瀬正樹, 触法精神障害者についての医療診断をめぐる不確実性, 『論集』29, 査読無, pp. 23-39, 2011.
- 20) 榎原哲也, 現象学的看護研究とその方法 新たな研究の可能性に向けて, 『看護研究』第44巻第1号, 査読無, pp. 5-16, 2011.
- 21) 榎原哲也, 育むということ 現象学的哲学の視点から, 『文化看護学会誌』第3巻第1号, 査読無, pp. 50-53, 2011.
- 22) Tetsuya Sakakibara, Reflection Upon the Living Present and the Primal Consciousness in Husserl's Phenomenology, *Phaenomenologica* 197, 査読無, pp. 251-271, 2010.
- 23) Tetsuya Sakakibara, Phenomenology in a different voice: Husserl and Nishida in the 1930s, *Phaenomenologica* 200, 査読無, pp. 679-694, 2010.

〔学会発表〕(計28件)

- 1) 一ノ瀬正樹, 予防原則と借金モデル - 「前門の虎, 後門の狼」に立ち向かう -, 問われる大学知「哲学熟議 in 東京大学」, 2014年3月11日, 東京大学工学部, 東京都
- 2) Richard Dietz, Actuality as a historical modality, Korean Society for

Analytic Philosophy Winter Conference, 2014年02月22日, Seoul University, 韓国

3) 松浦和也, ミレトス学派再考, 第1回 PAP研究会, 2014年02月21日, 熊本大学, 熊本県

4) Richard Dietz, The possibility of vagueness, Current Trends in Analytic Philosophy, 2014年2月6~7日, Yonsei University, 韓国

5) 松永澄夫, 精神医学と価値の問題, 京都大学医学部精神科講演会, 2013年11月10日, 京都大学医学部附属病院精神科神経科, 京都府

6) Richard Dietz, The possibility of vagueness, Mind & Language Symposium, 2013年10月26日, Stockholm University, Sweden.

7) ICHINOSE Masaki, Beebee on Hume's inductive scepticism, WEB International Conference, 2013年10月12日, International Research Center for Philosophy Toyo University, 東京都

8) SAKAKIBARA Tetsuya, Die Intentionalität der Pflegehandlung, Internationale Tagung des Husserl-Archivs Koeln in Zusammenarbeit mit der Deutschen Gesellschaft fuer phaenomenologische Forschung, 2013年09月27日, Universitaet zu Koeln, Koeln, Germany.

9) SAKAKIBARA Tetsuya, Phenomenology of Caring from an East-Asian Perspective, XXIII World Congress of Philosophy "Philosophy as Inquiry and Way of Life", 2013年08月05日, University of Athens, ギリシア共和国

10) ASAKURA Tomomi, After New Confucianism: Whither Modern Chinese Philosophy?, Australian National University, 2013年09月07日, Australian National University, オーストラリア.

11) Richard Dietz, Understanding Vagueness, Research seminar talk, 2013年06月11日, Queen's University Belfast, Ireland.

12) Tomomi Asakura, Kōyama and the Problem of Doctrinal Taxonomy, Japanese Philosophy as an Academic Discipline, 2011年12月11日, 香港中文大学 中華人民共和国

13) 信原幸弘, Responsibility and Self-control, The 2nd International Conference on Comparative Studies in Mind, 2011年12月1日, Chung-Ang University, 韓国.

14) 一ノ瀬正樹, 「東日本大震災後の未体験ゾーン - 日本における低線量被曝論争の構図 - 」, 日台国際研究会「東アジアの死生学へ」, 2011年10月7日, 国立中山大学社会科学学院, 台湾

15) 信原幸弘, 脳科学と人間観への影響, 脳科学若手の会研究会, 2011年8月27日, 東京大学駒場キャンパス, 東京都

16)鈴木泉, 「<ヘーゲルかスピノザか>再考—規定は否定か—」, 日本ヘーゲル学会第13回研究大会, 2011年6月18日, お茶の水女子大学, 東京都

17)信原幸弘, 脳と心の現在, 比較思想学会第38回大会, 2011年6月18日, 早稲田リサーチパーク・コミュニケーションセンター, 東京都

18)Tetsuya Sakakibara, Phenomenological Research of Nursing and Its Method, Phenomenology as Bridge between Asia and the West Conference "Phenomenology and the Other Disciplines", 2011年5月24日, セントルイス大学, アメリカ合衆国

19)Masaki Ichinose, Rethinking The Death Penalty: Uncertainties over Harm, Blame, and Dangerousness, Tenth East-West Philosophers' Conference, 2011年5月18日, ハワイ大学, アメリカ合衆国

20)一ノ瀬正樹, 死の被害性, 日本イギリス哲学会第35回研究大会, 2011年3月28日, 京都大学, 京都府

18)信原幸弘, 日常知と脳神経科学リテラシー, シンポジウム「脳科学と科学技術コミュニケーション」 2011年3月6日, 東京大学駒場キャンパス, 東京都

19)鈴木泉, 「ライブニッツはスピノザ哲学の何に惹かれ, 何を恐れたのか?」, 文部省科学研究費「近現代哲学における虚軸としてのスピノザ」第2回研究会「ライブニッツとスピノザ, 18世紀へ」(日本ライブニッツ協会・スピノザ協会との共催) 提題, 2011年3月6日, 大阪大学文学部, 大阪府.

20)SUZUKI Izumi, Philosophie de la ritounelle. Deleuze & Guattari et pop-music, LA PHILOSOPHIE FRANCAISE CONTEMPORAINE EN ASIE, Journée d'étude internationale organisée par Hisashi Fujita et Arnaud François, Centre International d'Étude de la Philosophie Française Contemporaine (CIEPFC) et Master Erasmus Mundus EuroPhilosophie, 2011年2月10日, École normale supérieure, フランス.

21)SUZUKI Izumi, Philosophy of Non-Humanism reconsidered: Deleuze and Ritornello, The 5th Annual Philosophical Meeting BESETO: Rationality in Human Life, 2011年1月9日, Peking University, 中華人民共和国

22)Masaki Ichinose, Death Penalty and Human Rights, The 2010 Uehiro Lectures, 'Modes of Responsibility', 2010年11月25日, The University of Oxford, 英国

23)Masaki Ichinose, Freedom, Responsibility, and Natural Phenomena, The 2010 Uehiro Lectures, 'Modes of Responsibility', 2010年11月22日, The University of Oxford, 英国

24)Masaki Ichinose, Who is a Victim of

Homicide?, The 2010 Uehiro Lectures, 'Modes of Responsibility', 2010年11月16日, The University of Oxford, 英国

25)一ノ瀬正樹, 「動物への配慮」の欠落と充実, 死生学シンポジウム「ヒトと動物の関係をめぐる死生学」, 2010年9月4日, 東京大学小柴ホール, 東京都

26)Yukihiro Nobuhara, Weakness of the will and loss of spontaneity, The 48th Annual Meeting of the Biophysical Society of Japan, 2010年9月20日, 東北大学, 宮城県.

27)Masaki Ichinose, Degrees of Freedom and Life Science, Metaphysics of Science Conference, 2010年8月5日, Kyung Hee University Seoul, 韓国

28)一ノ瀬正樹, 生命現象と自由, 第10回東京大学生命科学シンポジウム, 2010年5月1日, 東京大学安田講堂, 東京都

〔図書〕(計8件)

1)信原幸弘, 『心の哲学 認知篇』, 勁草書房, 2014, (印刷中).

2)松永澄夫, 『価値・意味・秩序』, 東信堂, 2014, 498頁.

3)野矢茂樹(編), 一ノ瀬正樹他, 『子どもの難問 - 哲学者の先生, 教えてください!』, 中央公論新社, 2013, 198頁.

4)一ノ瀬正樹(ほか5名), 『低線量被曝のモラル』, 河出書房新社, 2012, 351頁

5)朝倉友海, 『概念と個別性 スピノザ哲学研究』, 東信堂, 2012, 302頁.

6)一ノ瀬正樹・新島典子, 『ヒトと動物の死生学 - 犬や猫との共生, そして動物倫理』, 秋山書店, 2011, 167頁.

7)一ノ瀬正樹, 『死の所有 - 死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学』, 東京大学出版会, 2011年, 408頁.

8)一ノ瀬正樹, 『確率と曖昧性の哲学』, 岩波書店, 2011年, 320頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
特に該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

一ノ瀬 正樹 (Ichinose Masaki)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20232407

(2) 研究分担者

天野 正幸 (Amano Masayuki)
東京大学・大学院人文社会系研究科・名誉教授
研究者番号：40107173
(平成23年度まで研究分担者)

高山 守 (Takayama Mamoru)
東京大学・大学院人文社会系研究科・名誉教授
研究者番号：20121460
(平成24年度まで研究分担者)

松永 澄夫 (Matsunaga Sumio)
立正大学・文学部・教授
研究者番号：30097282

榊原 哲也 (Sakakibara Tetsuya)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20121460

鈴木 泉 (Suzuki Izumi)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：50235933

信原 幸弘 (Nobuhara Yukihiro)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：10180770

朝倉 友海 (Asakura Tomomi)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：30572226

ディーツ リチャード (Richard Dietz)
東京大学・大学院人文社会系研究科・講師
研究者番号：10625651
(平成24年度より研究分担者)

松浦 和也 (Matsuura Kazuya)
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：30633466
(平成24年度より研究分担者)

(3) 連携研究者

石浦 章一 (Ishiura Shoichi)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：10158743

吉田 聡 (Yoshida Akira)
千葉工業大学・情報科学部教育センター・助教
研究者番号：90451781